

Journal of Chubu University Education

No.18

2018

【実践研究・実践報告】

アメリカ文学：教材とする作品をどう選ぶか

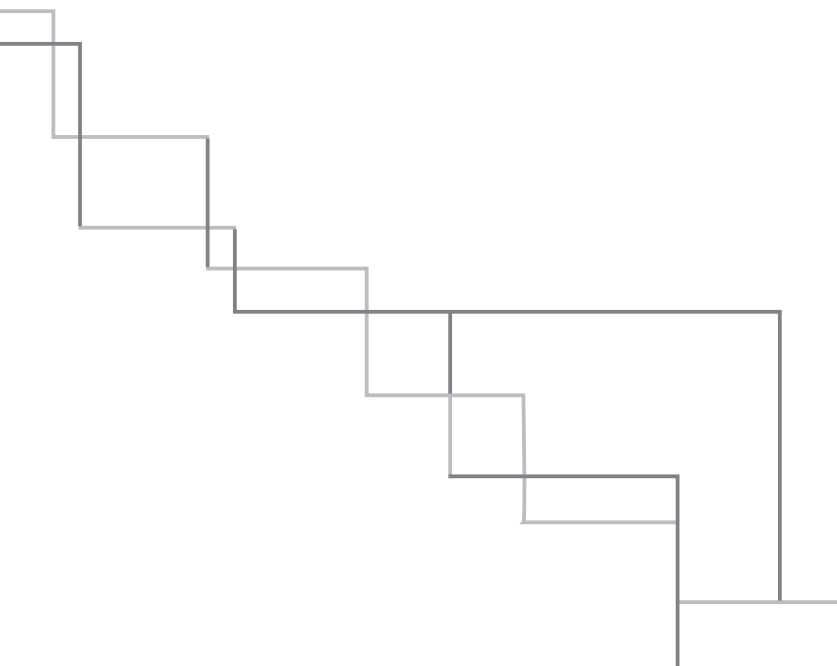
－文学作品を通して教えるアメリカの多文化社会－ 島津信子

【Practical Reports】

How I Choose Literary Works for My American Literature Course:

Teaching American Social Diversity through Multicultural Literary Texts

..... SHIMAZU Nobuko



アメリカ文学：教材とする作品をどう選ぶか

ー文学作品を通して教えるアメリカの多文化社会ー

島 津 信 子*

要 旨

本稿は人文学部英語英米文化学科において、2年生対象の科目「英米の文学B」でアメリカ文学を教える際に、筆者がどのような考えに基づき、どのような作品を教材としているかを記すものである。アメリカ文学のキャノンの見直しは、公民権運動後、特に80年代以降、アメリカのアカデミズムで、そして日本の高等教育の場においても様々に論議されてきた。従来の白人男性作家に替わり、女性や少数民族民族の作家の著作が新たなキャノンとされる一方、このことに異議を唱える研究者も存在する。

筆者は文学を通して文化を理解する立場から多文化主義の観点に立ち、以下の四作品をアメリカ文学の授業の教材としている。それらは、ルイザ・メイ・オルコット作の『若草物語』(*Little Women*, 1868)、F・スコット・フィッツジェラルド作の『グレート・ギャツビー』(*The Great Gatsby*, 1925)、アリス・ウォーカー作の『カラーパープル』(*The Color Purple*, 1982)、エイミ・タン作の『ジョイ・ラック・クラブ』(*The Joy Luck Club*, 1989)である。本稿はそれぞれの作品ごとにその選択の根拠も提示している。

キーワード

アメリカ文学授業、キャノン、シラバス、多文化主義、マイノリティ文学

1 はじめに

英語英米文化学科においては、2年次に「英米の文学」という科目を設けているが、春学期開講の「英米の文学A」はイギリス文学を教えるコースであるのに対して、秋学期開講の「英米の文学B」はアメリカ文学を講じるコースである。本稿は「英米の文学B」でアメリカ文学を教える際に、筆者がどのような考えに基づいて、どのような作品を教材に選んでいるかを述べ、それぞれの作品ごとにその選択の理由を記すものである。

さて、英語英米文化学科においては、「英米の文学」は文学作品を通して学生に英語圏の文化を理解させる授業という位置づけである。したがって、「英米の文学B」の授業で取り上げる作品は、その作品の学習を通じてアメリカ文化への理解を深めるものでなければならない。それでは、そもそも文学作品を通じてアメリカ文化を理解するとはいかなることを指すのか。これは簡単には答えられない問いであるが、あえて単純化して言えば、文学作品の主人公が経験する葛藤を通して見える社会の有り様や価値観を読み取り、それを文化の一樣相として捉えることだと筆者は考える。一

つの作品がアメリカ文化の一樣相を描くのだとすれば、複数の作品によって文化の樣相はさらに多層的に見えてくるはずだ。では、一学期間で取り上げる複数の作品とはアメリカ文化についてのどのような観点に基づいて選ぶべきなのか。そして、各作品がそれぞれ選択される根拠とは何か。本稿は以上の点についての筆者の実践を報告するものである。

2 キャノンをめぐる論議

ここで、アメリカ文学で何を教えるべきかという、いわゆるキャノン（正典）をめぐるアメリカのアカデミズムにおける論議について言及したい。そもそもキャノンとは何かという定義について見ていこう。用語解説サイト「コトバンク」の「キャノン」の項目における井上健の記述によると、この言葉はもともと聖書の外典に対して、公認された正典を表す語で、転じて標準、基準を意味するようになり、さらに現代文芸批評では、アカデミズム、教育機関等において、偉大な、学ぶに値するとして権威づけられた文学作品を指すようになった¹⁾。では、いったんキャノンとして認定された作品がずっとその地位を占め続けるかというと、

* 人文学部 英語英米文化学科 教授

そういうわけではない。

別府恵子・渡辺和子編の『新版アメリカ文学史：コロニアルからポストコロニアルまで』で記されているように、1960年代から70年代にかけての公民権運動、大学紛争、女性解放運動などを契機にして、大学のカリキュラムの解体、再編成が起こった。そして、それまでの白人男性中心主義がゆらぎ、長く沈黙を強いられてきた少数派民族、女性、あるいは同性愛者などの少数者の立場から「アメリカ文学の再構築」が模索されるようになる²⁾。その結果、80年代以降はアメリカの大学においてはキャンソンの大幅な組み替えがもたらされたのである。

キャンソンの組み替えについては、筆者もアメリカの大学で身をもって経験し、その変化に驚いたことがある。そこで、その個人的な経験に触れながら、キャンソンの変遷について述べる。筆者は1979年にUniversity of Michigan大学院英文学修士課程に在籍しており、「アメリカ小説」というコースを履修した。この授業の担当はジョセフ・プロットナー教授で、彼はフォークナー研究の権威であり、フォークナーと個人的に親しかった友人としても著名であった。そのような教授の教えるコースであるから、この授業で扱われる作品こそアメリカ文学を代表するキャンソンである、と筆者は疑いもなく信じていた。

ここに、プロットナー教授のコースで取り上げられていた作品を思い出すまにに列記してみたい。1学期間に、この授業で読んだ記憶がある作品は、ナサニエル・ホーソンの『緋文字』(*The Scarlet Letter*, 1850)、ハーマン・メルヴィルの『白鯨』(*Moby-Dick*, 1851)、マーク・トウェインの『ハuckleベリー・フィンの冒険』(*The Adventures of Huckleberry Finn*, 1885)、セオドア・ドライサーの『シスター・キャリー』(*Sister Carrie*, 1900)、シャーウッド・アンダーソンの『ワインズバーグ・オハイオ』(*Winesburg, Ohio*, 1919)、シンクレア・ルイスの『メイン・ストリート』(*Main Street*, 1920)、F・スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』(*The Great Gatsby*, 1925)、アーネスト・ヘミングウェイの『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926)、ウィリアム・フォークナーの『八月の光』(*Light in August*, 1932)、ナサニエル・ウェストの『いなごの日』(*The Day of the Locust*, 1939)、ラルフ・エリソンの『見えない人間』(*Invisible Man*, 1952)の11作品である。これ以外にも記憶から漏れている作品があるかもしれない。

さて、その後ちょうど20年を経た1999年の夏、筆者はIndiana University of Pennsylvania大学院英文学博士課程に入学し、アメリカの大学で再びアメリカ

文学のコースを受けることになった。その時の授業で扱われた作品は、20年前にプロットナー教授の下で学んだ作品とは大きく様変わりしていた。どの授業のリーディング・リストにも、筆者にとっては耳慣れない名前の作家が多く取り上げられていた。ちなみに記憶をたどりながら、19世紀半ば以降の小説の分野だけに限定して、それらの作家の名前を挙げてみる。その作家たちとは、サラ・オーン・ジュエット (1849 - 1909)、ケイト・ショパン (1850 - 1904)、シャーロット・パークインス・ギルマン (1860 - 1935)、ゾラ・ニール・ハーストン (1891 - 1960)、ネラ・ラーセン (1891 - 1964)、マキシム・ホン・キングストン (1940 -)、レスリー・マーモン・シルコウ (1948 -)、サンドラ・シスネロス (1954 -) などである。これらは複数のアメリカ文学のコースで取り上げられていた作家であり、他にも筆者にとって初めて耳にする作家もいた。

これらの作家たちに共通することは、まず全員が女性であること、そして少数派民族出身者が多くを占めていることである。ゾラ・ニール・ハーストンとネラ・ラーセンはアフリカ系アメリカ人作家、マキシム・ホン・キングストンはアジア系アメリカ人作家、レスリー・マーモン・シルコウはネイティブ・アメリカ人系作家、サンドラ・シスネロスはラテン系アメリカ人作家である。先に示した、1979年当時のUniversity of Michiganでプロットナー教授の取り上げた作家たちは全員が男性で、しかもラルフ・エリソン以外はすべて白人の作家であった。それとは対照的に、1999年のIndiana University of Pennsylvaniaの授業で筆者の目に留まった作家たちは、全員が女性であり、その多くがマイノリティ出身者だったのである。

このことは、白人男性中心主義によるアメリカ文学史やキャンソンの形成のプロセスを、少数者の立場から読み直そうという1970年代以降の機運が結晶した表れといえよう。井上健が指摘するように、80年代以降の、文化研究、フェミニズム批評、新歴史主義批評の興隆とも相まって、アメリカのアカデミズムにおいてはキャンソンの大幅な組み替えがもたらされ、その結果、それまで文学史や文学研究から排除されていた、少数派の文学が相当数、救い出された。この動向はほぼ10年遅れて日本にも及び、文学研究や文学批評の対象を大きく様変わりさせた。このようなキャンソンの組み替えに関しては、賛否両論がある。反対派の人々は新たにキャンソンとされた作品の質に疑問を呈する。文化の多元性に留意しつつも、文学作品の質にもこだわり、いかにこの二つを両立させて文学を研究していくかが今日の課題となっている³⁾。

キャンソンの組み替えについて、日本のアカデミズムにおいて、その意見を鮮明に表明した研究者に渡辺利

雄がいる。渡辺は、女性、少数民族系の文学者が優遇される一方で、過去において権威とされた白人男性の文学者が否定されている事実を嘆く。渡辺は、そうした白人男性作家の例としてシンクレア・ルイスを挙げる。ルイスはアメリカの文学者として初めてノーベル文学賞を受賞したにも関わらず、アメリカ文学史のアンソロジーの代表的な著作である *The Heath Anthology of American Literature* にその作品が含まれていない。渡辺によれば、これはルイスの意識に見え隠れする女性蔑視、偏見のせいで、女性解放を求める識者の反発をかったためである。このことに、渡辺は異議を唱える。ルイスがノーベル文学賞を受賞した1930年の時点で、彼が国際的に評価されていた事実や、現時点からすると不徹底なものであっても社会における女性の問題へ眼を向けていた点から、アメリカ文学史の中にルイスの占める場所が当然あるべきだ、と渡辺は主張する。そしてキャンソンの見直しについて、結局、これは60年代を学生として体験した世代と、それ以前の世代の世代間闘争の側面がある、と渡辺は見る。学生運動を闘ってきた世代が、学問研究の進路を決定する力と地位を得て、彼らの望む進路が「政治的に正しい」(politically correct) 方向へ傾くあまり、そこには「不寛容」と「脅迫」が目立つのではないかと渡辺は危惧するのである⁴⁾。

3 英語英米文化学科におけるキャンソンの考察

ここまで述べてきたキャンソンをめぐる論議を踏まえて、それでは本学の英語英米文化学科においては、どのような視点から、アメリカ文学の授業で取り上げる作品を選択すべきかを考察する。前述のように、英語英米文化学科においては、「英米の文学」はあくまでも文学作品を通して学生に英語圏の文化を理解させるのが目的の授業である。したがって、正典をめぐる論議に関しては、筆者は自ずとキャンソン見直しの側に立つ。

この立場はチャールズ・テイラーの主張する多文化主義に基づく。テイラーは、多文化社会では少数民族の差異を否定して多数派の文化へ同化させることよりも、それを受容することにより、真に民主的で文化的に豊かな社会が実現すると述べる。さらに、彼は学校教育の場の重要性を説く。テイラーによれば、学校で少数民族出身者は自らの属する民族の体験を伝える作品を学び、肯定的に自己のアイデンティティーを育むとともに、多数派に属する者たちも少数民族の文化への認識を高め、両者は互いへの理解を深めるといふ。加えて、作品の価値を測る基準も従来の伝統的な作品に用いられた尺度だけではなく、少数民族による作品から得られる新たな基準も加わり、より重層的な価

値基準が得られるとテイラーは力説する⁵⁾。筆者はこのテイラーの考えに賛同し、アメリカ文学の授業では少数民族出身の作家の作品を積極的に取り上げている。

ここまでは、キャンソン形成に関する様々な観点を眺めてきたが、ここからは、それに加えて筆者が作品選びの際に考慮している事柄について言及する。アメリカ文学を教える際に、筆者がまず考えているのは、選んだ作品の背景となる地域がなるべく多岐にわたることである。現在、アメリカ文学の授業で取り扱っているのは四作品である。学生の理解度を考慮すると、これが、オリエンテーションの回と期末試験のための復習の回を含める、15週間で教えられる上限の作品数である。これらの四作品の舞台となっている地域が重ならないように、そして各々の作品がその背景とする地域の独自性を表していることを念頭に置き、筆者は作品を選んでいく。

次に、アメリカ文学の授業で扱う作品で筆者が意識するのは、その教材がアメリカの歴史と関連づけて語れるかという点である。とはいえ、これはあくまでも文学の授業であり、歴史の授業ではないので、作品が必ずある歴史的出来事を背景としていなければならないということではない。しかし、作品中にアメリカ史の主要な出来事に言及できる手がかりとなる部分が含まれているかどうかを考慮した上で、筆者は作品を選んでいる。

さて、ここからは実際の観点から、筆者がアメリカ文学の授業の作品選びに際して優先させている事項について述べる。第一に、作品が映画化されているかどうかという点を、筆者は重要視している。というのも、本来ならば文学の授業であるから本を読めばいいだけなのだが、昨今の学生の読書経験のなさから、映像の力を借りざるをえないからである。したがって、アメリカ文学の授業では、取り扱うすべての作品について、映像を見せながら講義している。だが、一学期間に学ぶ作品の中から一作品については、映像を見る前でも後でも、時期は学生にまかせるが、必ず原作を読むように求めている。この場合にも、英語の原書をそのまま一冊読ませることは現実的には困難なので、日本語の翻訳版を課題図書として指定している。そして、期末試験の相応の部分、映画を見ただけでは答えられない、原作の抜粋からの設問にあてることにより、受講生の読書を促している。

さらに、アメリカ文学の授業で扱う作品は、主人公がさまざまな体験を通して葛藤しつつも精神的に成長していく作品、いわばアメリカ版の教養小説を選ぶよう筆者は心がけている。実際のところ、文学の授業を担当していて実感するのは、作品を読み、その意味を

解釈することに苦戦する学生が多いことである。時代が変わり、学生気質も変わったと言えばそれまでだが、映画や漫画、インターネット上の動画などは見るが、本を読まない学生が受講生の大半を占める。昔の学生のように、悩みがあったときに文学作品の主人公の生き方にその解決策を模索するということが、彼らにはないようだ。だからこそ、これから社会へ巣立っていく彼らに、少しでも小説の主人公に自分を重ねて、その苦闘と成長の跡を追体験してほしいと願っている。そういう訳で、主人公が成長を遂げる作品を、アメリカ文学の授業では意識的に選んでいるのである。

4 シラバス上の四作品とその選択の根拠

ここまでは、アメリカ文学の授業で取り上げる作品を決める上での、キャンノン形成の理論やその時代的な背景、さらに筆者の考える作品選択のための実際的な条件を述べてきた。ここからは、上述の考察に基づいて、実際にどのような作品を取り上げているのかを記す。そして、それらの作品を選んだ根拠と学生の反応についても述べていく。

前述のように、アメリカ文学の授業では四作品を取り上げているのだが、学生たちが最初に学習するのはルイザ・メイ・オルコット作の『若草物語』(*Little Women*, 1868)である。これは、四人姉妹の次女ジョーを主人公にして、姉妹たちが様々な経験をしながら成長していく物語で、日本でも広く親しまれている。まず、筆者が重要視する地域性が描かれているかという点であるが、この物語はアメリカに最初に入植したヨーロッパからの移民たちが築き、最も早い時期から学術文化の中心地となった東部のニューイングランドを舞台にしている。さらに、主人公の一家は敬虔なキリスト教徒であり、自身には質素な暮らしを課しながらも、困窮する隣人への慈善活動を行うなど、この作品にはこの地方に根づくピューリタンの精神風土が描かれている。このような点から、アメリカ文学を学ぶのに『若草物語』から始めるのは相応しいと筆者は考える。

さらに、『若草物語』が南北戦争を舞台にしている点も、この作品を取り扱う大きな根拠となっている。南北戦争は奴隷制度存続の賛否をめぐる争いとして有名だが、産業構造の違いから自由貿易主張の南部と保護貿易擁護の北部が対立した内戦であった。この過酷な闘いの苦難を経て、アメリカは統一国家としての体制を整え、その後の発展の礎を築く。本作品には、リンカーン大統領の有名な「人民の、人民による、人民のための政治」というゲティスバーグの演説に言及する場面もあり、アメリカが理想とする自由と平等の原則が描かれている。本作の学習を通じ、受講生は入植開始当時から南北戦争を経て統一国家となるまでのア

メリカ史を俯瞰し、その建国の精神に触れることになる。この点から、『若草物語』はアメリカ文学の授業で最初に取り上げられる作品として最適だと確信する。

『若草物語』は少女たちの成長を描く物語である。彼女たちが抱く夢と現実生活への不満、両親や姉妹との関係、自分の性格についての悩みなど、ここに書かれている内容は、時代と場所を越えて、今の若者たちにも共通する問題だ。それゆえ、学生たちも物語の世界へすんなりと入っていくように見える。そして、当時のヴィクトリア時代に理想とされた「家庭の天使」という女性像に反して、自分の望む生き方を追い求める主人公の生き方に憧れと共感を抱く受講生が多いことは、毎回、授業の終わりに書かせている彼らの講義内容に関するコメントから明らかである。つまり、この作品は受講生から支持されており、そのような作品を取り上げることは学生の授業への興味を高め、円滑に授業を運営する上で効果的だと筆者は考える。

アメリカ文学の授業で扱う二つ目の作品はF・スコット・フィッツジェラルド作の『グレート・ギャツビー』(*The Great Gatsby*, 1925)である。『若草物語』が東部を舞台にしていたように、『グレート・ギャツビー』の物語も実際の出来事は東部で起こる。しかし、主人公のギャツビーや物語の語り手のニックは中西部の出身者であり、彼らは東部の人々とは異なる精神性を示す。小説の終わりで、ブキャナン夫妻はギャツビーに殺人の罪を着せたまま、良心の呵責なく軽薄な振る舞いを続ける。彼らをはじめとする東部の都市に住む金持ちの姿に、ニックは退廃の極みを見る。そして、こうした東部社会の醜悪さや道徳的な腐敗に、中西部出身者のギャツビーが「無垢」をもって挑み、敗北した姿に不条理さを痛感する。その結果、小説の結末では、ニック自身も墮落した東部の都市を去り、中西部へと帰っていく決心をする。『グレート・ギャツビー』の出版は『若草物語』の刊行から半世紀以上も後のことで、ここで描かれる東部社会も『若草物語』におけるキリスト教的道徳観に基づいた社会とは様変わりしている。『グレート・ギャツビー』ではこうした東部とは異なる、「無垢」で「ナイーブ」な中西部の精神性が描かれる。このような中西部の地域性を示すために、『グレート・ギャツビー』は格好の作品なのである。

『グレート・ギャツビー』は1920年代の禁酒法時代を背景とする小説である。悪名高い禁酒法が生まれたのは、アメリカにおけるピューリタニズムが極端に走ったせいとも評されるが、一方で、酒の密造や密輸で台頭したアル・カポネのような暗黒の帝王も出現する。第一次世界大戦を経て、アメリカは好景気に沸き空前の繁栄を上げていた。そうしたなか、闇のビジネスに手を染めて大金持ちとなるのが『グレート・ギャツビー』

の主人公ギャツビーである。本作では、こうした歴史的背景や、ジャズ、自動車などの当時の大衆文化の描写が鮮明になされている。こうした点から、本作をアメリカ文学の授業のテキストとして採用している。

『グレート・ギャツビー』もまた、一人の少年の成長物語として読むことができる。だが、ここではハッピー・エンドは待っていない。ミネソタの片田舎で、ひたすら成功を夢見て、勤勉、努力、自己啓発に努めた少年が手にしたのは闇の世界で築いた巨万の富だった。しかし、彼が何としても手に入れたかった、かつての恋人デイジーとは結ばれることはない。そして、小説はギャツビーの悲劇的な死で結末を迎える。この小説はアメリカ文学を代表する作品として、批評家の間で高い評価を受けきた。その理由は、この小説がアメリカ文学に繰り返し現れるテーマである「アメリカン・ドリーム」を扱っているからだだろう。「アメリカン・ドリーム」とは、人は誰でも機会を得て、自己の能力を最大限に発揮することにより、より豊かな生活を手に入れ、幸福になれるという世界観である。ギャツビーの場合には、デイジーこそ彼の「アメリカン・ドリーム」を体現する存在だったが、彼が彼女を手に入れることは叶わない。この小説は、主人公の成長物語というより、「アメリカン・ドリーム」を追い求めた彼が挫折と破滅にいたる姿を描いている。だが、アメリカ文学の主要なテーマである「アメリカン・ドリーム」を真正面から扱っているからこそ、本作がアメリカ文学の不朽の名作と言われ、筆者も授業で採用している所以である。

アメリカ文学の授業で三番目に取り上げる作品はアリス・ウォーカー作の『カラーパープル』(*The Color Purple*, 1982)である。これまでの二作品が東部と中西部に関わりがあるのに対し、この作品は南部のジョージア州が舞台となっている。受講生は『若草物語』で南北戦争から奴隷制度廃止までの歴史を学んでいるが、それは白人の視点からのものである。本作で、彼らは黒人の側に立ち、それ以降の南部社会を見ることになる。この小説の主人公は黒人女性のセリーである。セリーの経験する出来事の不条理性は彼女が黒人であり、さらに女性であることを抜きにしては考えられない。それを認識することこそ、アメリカ社会の多様性を理解するために不可欠だ。この確信から、筆者は本作品をアメリカ文学の授業のシラバスに加えている。

歴史的な背景を見てみると、『カラーパープル』の物語は20世紀初頭の1909年から始まり、約40年にわたる歳月を舞台としている。物語の冒頭は奴隷解放からほぼ半世紀が経った頃であり、結末は第二次世界大戦終了の数年後である。講義ではこの期間の歴史にも触れるが、強調するのは50年代から60年代にかけての公

民権運動を中心としたアメリカの現代史である。マーティン・ルーサー・キング牧師で有名な公民権運動は、黒人への人種差別撤廃を求めるものだったが、70年代以降も他の少数派民族出身者、女性、同性愛者などのマイノリティ解放運動へと広がっていく。『カラーパープル』の作者ウォーカー自身も60年代に活動家として公民権運動に参加した後、1982年にこの小説を発表している。作品の内容はマイノリティの解放と自立という公民権運動の趣旨に沿ったものである。このように、『カラーパープル』は現代アメリカ史で重要な意味をもつ公民権運動の思想を伝えるのに最適な作品であり、アメリカ文学の授業で取り上げるのに相応しい教材である。

『カラーパープル』には、白人と黒人の階級の違いやそこから生じる人種差別、さらに白人による黒人への虐待が描かれている。だが、それよりも悲惨なのは、黒人男性が黒人女性に対して行う支配、虐待の数々である。セリーも、少女時代から義父や夫から性的虐待や言葉による虐待を受け続ける。ここで描かれるのは、マイノリティのなかにも階級制度があり、白人から差別されているマイノリティの男性は、マイノリティの女性をより低い階層に位置づけ、彼女たちを支配、虐待するという構図である。

『カラーパープル』は主人公のセリーが困難に耐え、大きく成長する姿を描いている。彼女は少女の頃から周囲の男たちに「醜く、何のとりえもない」存在と言われ続けて、自身をそのようなものと認識するようになる。セリーには社会の最下層で虐待に耐え、沈黙するしか術がない。そんなセリーだが、やがて彼女は黒人女性同士の愛と友情に支えられ、長年、支配されてきた夫に自分の意見を述べ、闘う女へと変身する。さらに小説の後半では、彼女は自らの技術と才覚により経営者として経済的にも成功を収める。こうしたセリーの成長物語に対して、受講生の多くが非常に肯定的な反応を示しており、『カラーパープル』は彼らに好意的に受け入れられている。

『カラーパープル』は1983年にピューリッツァー賞を受けているが、その一方で、作品中の黒人男性のステレオタイプの描写をめぐって、黒人の中からの批判もあった。だが、そのようなことを考慮に入れても、『カラーパープル』が公民権運動や女性解放運動などの20世紀アメリカの社会的かつ文化的に重要なムーブメントを学ぶために格好なテキストであることは間違いない。

アメリカ文学の授業で四作目として取り上げるのはエイミ・タン作の『ジョイ・ラック・クラブ』(*The Joy Luck Club*, 1989)である。ここまでに取り扱った三作品から、学生たちは東部、中西部、南部の地域

性について知識を得ているが、この作品は西部のサンフランシスコを舞台としている。登場人物は中国からアメリカへ移民した女性たちと、そのアメリカ生まれの娘たちであり、この作品を通して、学生は初めてアジア系アメリカ人の体験を学ぶことになる。このように、『ジョイ・ラック・クラブ』はこれまでの作品では扱われていない西部を舞台にしている。また、アフリカ系アメリカ人とは別のマイノリティであるアジア系アメリカ人の経験を描いている。このことが、アメリカの地域性と民族の多様性を示すのを念頭に置いた本講で、この作品を教材として取り上げる理由である。

『ジョイ・ラック・クラブ』を歴史的な観点から見ると、物語で描かれる四組の母娘のうち、母親たちが中国からアメリカへ移民してくるのはいずれも1940年代の後半で、彼女たちはサンフランシスコに定住する。物語の結末はそれから40年後の1980年代後半が舞台となっており、娘たちは30年代の後半である。偶然にも、母親たちがアメリカに到着するのは、ちょうど『カラーパープル』の物語が結末を迎える時代に当たる。履修生たちはひとつのマイノリティの物語の終結を見た後、それに引き続く時代の別のマイノリティの物語を学ぶことになる。講義では、東部のニューヨーク港へ到着したヨーロッパ系移民とは別に、大陸横断鉄道建設の労働力となった中国系移民や、その後の日系移民などが太平洋を渡って西部へ到着した史実を解説する。このように、本作を手がかりとしてアメリカの移民史を概観できる点も、『ジョイ・ラック・クラブ』を教材として採用する理由の一つである。

『ジョイ・ラック・クラブ』では、一人の主人公の成長が描かれるというより、母親と娘がどのようにして世代間の文化の違いを乗り越え、相互理解にいたるかという点が強調されている。母親たちはそれぞれの事情は異なるが、男尊女卑の因習に満ちた祖国を捨て、「自由」と「可能性」を求めてアメリカの地を踏む。そして、彼女たちは自らの希望を各々の娘に託し、娘の成功をひたすら夢見る。その意味で、この作品は中国系移民の母親たちが「アメリカン・ドリーム」を希求する物語であり、受講生は『グレート・ギャツビー』とは違う形の「アメリカン・ドリーム」の物語をここで学習することになる。このように、本作を教材に選択することにより、アメリカ文学の重要テーマである「アメリカン・ドリーム」について連続して考察できる点も、『ジョイ・ラック・クラブ』を本講で取り上げる根拠の一つだ。

『ジョイ・ラック・クラブ』を本講のシラバスに加えるべきだと考える最後の理由は、この作品がアジア系アメリカ人を扱っているからである。主人公をはじめとする登場人物は中国系アメリカ人であるが、彼ら

のヨーロッパ系アメリカ人とは異なる感受性や行動パターンは、私たち日本人にも共通するものだ。彼らはヨーロッパ系アメリカ人と比べると、考えていることをストレートに言葉にできず、過度の自己抑制や他者優先からくるコミュニケーション不全に陥る。こうした異文化間コミュニケーションの齟齬は家庭内の母親と娘の間にも存在する。合理主義の娘は、母親を中国的な迷信の世界に生きる存在と認識し、その外見や強いアクセントがある英語を「恥」と感じる。一方、母親は娘に中国的な「知恵」を授けられず、娘から「恥」だと思われることを嘆く。このように、『ジョイ・ラック・クラブ』では中国系アメリカ人とヨーロッパ系アメリカ人の間のコミュニケーション、そして家庭内の母と娘の間のコミュニケーションという二つの異文化コミュニケーションが描かれている。本作を学ぶことにより、受講生は欧米人とは異なるアジア人としての自らの言動パターンを認識し、どのように異文化と向き合うべきかという考察の機会を得るはずだ。この点も『ジョイ・ラック・クラブ』を本講の教材として採用する大きな根拠となっている。

5 まとめ

本稿は英語英米文化学科の学生を対象に、アメリカ文学を教える科目の「英米の文学B」において、筆者がどのような考えに基づいて、どのような作品を取り上げているかを報告するものである。

本稿ではまず何がキャンノンかというアメリカ文学をめぐる論議について言及した。アメリカのアカデミズムでは1970年代以降からキャンノンの見直しが盛んに行われるようになった。これはアメリカ社会の変化に起因するものだ。1960年代に盛り上がりを見せた公民権運動はその後の女性や他のマイノリティの解放運動へと発展する。やがて、政治的公正性の概念が大学のカリキュラムにも影響を与え、ほとんど白人男性作家の作品のみで構成されていたアメリカ文学のシラバスに、それまで顧みられなかった女性や少数派の作品が取り上げられ始める。こうしたアメリカの風潮は日本のアカデミズムへも及び、日本の大学でもアメリカ文学のキャンノンの見直しが行われるようになる。だが、アメリカでそうであったように、日本においてもキャンノンの見直しは政治的公正性に傾き過ぎていて、不寛容だとして、キャンノンの見直しを再検討すべきとの意見も聞かれる。

キャンノン見直しに関する筆者の立場は、文学を通して文化を学ぶという英語英米文化学科における文学の授業の目的に鑑みて、チャールズ・テイラーの説く多文化主義に拠っている。それは、多文化社会にあっては少数派民族の差異を否定して、多数派への同化を促

すよりも、差異を受容することにより、真に民主的で文化的に豊かな社会が実現するという考えである。この観点に賛同し、筆者はアメリカ社会の多様性を理解させるために、アメリカ文学のコースで少数民族出身の作家を積極的に取り上げている。

この基本的な立場に加えて、筆者は作品を選ぶ際に次の四つの事柄を考慮に入れている。まず、各作品の舞台となる地域が重ならないことである。各々の作品が異なる地域を背景として、その地方の特色を伝えていることを念頭に、作品を選んでいく。次に、作品を通じてアメリカ史における重要な出来事を、時代の流れに沿って解説することを意識して教材を決めている。三番目の留意点として、取り上げる作品はすべて映画化されていることを条件にしている。最後に、ポジティブな結末を好む学生たちのために、主人公の成長物語が描かれる作品を優先して取り上げている。

上記のような作品選択のための条件を考慮した上で、現在、アメリカ文学の授業で取り上げている四作品を記す。まず、最初に取り上げるのはルイザ・メイ・オルコット作の『若草物語』である。この作品は東部のニューイングランドを舞台にしている。ここではピューリタン文化に影響された主人公一家の暮らしが描かれている。この作品は南北戦争の時代を背景としており、そこからアメリカの統一国家への歩みと、その自由と平等の精神を学ぶことができる。さらにヴィクトリア時代の女性像を打ち破る、行動的な少女ジョーの成長物語は受講生の共感を呼ぶものである。以上の理由から、『若草物語』をアメリカ文学で取り上げる最初の作品としている。

アメリカ文学の授業で二番目に扱う作品はF・スコット・フィッツジェラルド作の『グレート・ギャツビー』である。この作品では、主人公と物語の語り手が中西部の出身であり、彼らは東部の墮落とは異なる、無垢でナイーブな中西部の精神性を示す。さらに、この作品は第一次世界大戦から1920年代の禁酒法時代のアメリカの世相、自動車やジャズなどの大衆文化を学ぶのに格好の教材である。けれども、これは主人公の成長物語とは言えない。なぜなら、主人公の野心は無残な形で挫折してしまうからだ。だが、この物語はアメリカ文学の主要なテーマである「アメリカン・ドリーム」を真正面から扱っている。その点が、この作品をアメリカ文学の授業で取り上げる一番の理由なのである。

アメリカ文学の授業で三番目に取り扱う作品はアリス・ウォーカー作の『カラーパープル』である。この物語は南部のジョージア州を舞台としており、この地域の独自の風土性を描いている。前述のように、多文化主義の立場から、筆者はマイノリティ出身の作家の著作を授業に取り入れようとしているが、本作の著者

ウォーカーはアフリカ系アメリカ人の女性作家である。彼女は60年代に公民権運動に参加した後、1982年に本作を発表している。作中からは当時の時代精神の影響が色濃く読み取れる。よって、本作を手がかりとして、受講生は公民権運動の現代アメリカ史に占めるインパクトを知ることになる。物語は、黒人であり、女性であるという二重の差別の下に社会の最下層に置かれた主人公が、周囲の黒人女性からの愛と友情に支えられて、差別を乗り越え成長する姿を描いている。このように、本作はアメリカにおけるマイノリティの経験を鮮明に描くもので、アメリカの多文化社会を理解するのに格好のテキストであることから、教材に採用している。

アメリカ文学の授業で四番目に取り上げるのはエイミ・タン作の『ジョイ・ラック・クラブ』である。この作品で、受講生は西部という新しい地域について学ぶ。彼らは新たにアジア系アメリカ人を描く作品に接することにより、東部へ到着したヨーロッパ系の人々の移民ルートとは異なる、西部へ到着したアジア系の人たちの移民パターンを知ることになる。この物語では家庭内の異文化コミュニケーションが描かれている。移民の母とアメリカで生まれ育った娘とが、いかにして相互理解へたどり着くか。そして娘の方はいかにしてアジア系アメリカ人として肯定的なアイデンティティを確立するか。これらが作品の主なテーマである。小説の登場人物たちと同じアジア人であり、異文化コミュニケーションを日頃から勉強している英語英米文化学科の学生にとって、本作を学ぶ意義は大きいとの判断から、筆者はこの小説をアメリカ文学の教材に加えている。

以上、英語英米文化学科における「英米の文学B」でアメリカ文学を教えるにあたり、筆者がどのような考えに基づいて、どのような作品を取り上げているかについて記してきた。アメリカ文学において古典と目されるような作品は数多い。そのなかで、どの作品をもってアメリカ文学を代表する著作として、大学教育の場で教えるべきかについては、本場のアメリカのアカデミズムに端を発し、日本の高等教育の場においても様々に論議されてきた。筆者は本学の英語英米文化学科における文学科目の位置づけに鑑みて、文化を理解するための手がかりとしての文学作品という基準から、アメリカ文学の教材を選んできた。同時に、選択した作品が青年期にある受講生たちの内面的な成長を助けるものであってほしいと切に願っている。

引用文献

1) 井上健「コトバンク キヤノン」

- 3%A3%E3%83%8E%E3%83%B3-51797, (参照2018-9-24).
- 2) 別府恵子・渡辺和子編 (1989)『新版アメリカ文学史—コロニアルからポストコロニアルまで—』京都：ミネルヴァ書房
- 3) 井上健「コトバンク キヤノン」
<https://kotobank.jp/word/%E3%82%AD%E3%83%A3%E3%83%8E%E3%83%B3-51797>, (参照2018-9-24).
- 4) 渡辺利雄 (1991)「アメリカ文学：正典（キャン）見直しを見直す」『英語青年』137(3), 130-132, 142頁。東京：研究社
- 5) Taylor, Charles, et al. *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*. Ed. Amy Gutmann. Princeton: Princeton University Press, 1994.

How I Choose Literary Works for My American Literature Course: Teaching American Social Diversity through Multicultural Literary Texts

SHIMAZU Nobuko*

* Professor, Department of English Language and Culture, College of Humanities, Chubu University

Abstract

This is a report of how I select literary works for my American literature course. In the wake of the Civil Rights Movement, especially after the 1980s, a reconsideration of the American literary canon, which had been dominated by white male authors, began to take place. As a result, the works by women and minority writers have been newly recognized as constituting the canon. However, there have been quite a few scholars who maintain that a review of the restructuring of the canon is necessary. Thus the formation of the canon has been a long-running dispute in American academism and later among scholars in Japanese higher education.

In this cultural climate, I take a stance of multiculturalism to meet the goal of teaching American social diversity through multicultural literary texts. Accordingly, I chose the following literary works for my American literature course: Louisa May Alcott's *Little Women* (1868), F. Scott Fitzgerald's *The Great Gatsby* (1925), Alice Walker's *The Color Purple* (1982), and Amy Tan's *The Joy Luck Club* (1989). The reasons for my selection of each text are also given in this article.

Key words

teaching American literature, canon, syllabus, multiculturalism, minority literature